

2024～2025 運営者へのアンケート調査 結果

【要約】

「いばしょ」の価値は、利用者にとってのみならず、「いばしょ」を構成するエコシステムの全てのステークホルダーにとって、ウェルビーイングを高める活動であることが明らかなです（「利用者へのアンケート」、「地域ネットワーク団体へのアンケート」、「寄付者へのアンケート」結果をご参照してください）

しかしながら、実際に活動している「いばしょ」においては、様々な想い、悩み、苦勞、喜びを分かち合いながら続けられています。各拠点でのこの活動が持続可能な状態を維持できなければ、せっかくの運営者の支援の「志・熱い想い」も実現することはできません。

今回の「運営者へのアンケート」では、持続可能な運営を実現するために必要な現場の状況を明らかにし、今後の「いばしょ」エコシステムとして必要な支援の在り方を検討することにつなげたいと考えています。

① 「いばしょ」の多様性とその意義

運営母体としては、7 割強が個人をベース（任意団体か個人）としたボランティアによる小規模な運営になっています。またNPO法人や社団法人といった組織的な運営によるものが 2 割弱で、個人ベースの拠点と比べると、比較的運営規模は大きいという特徴があります。

それらの「いばしょ」は、「運営母体×支援機能×規模」により、多様な運営形態が存在しています。そしてこの多様性こそが、「いばしょ」存在の本質になっています。つまり、運営者の志も、レベルもさまざまですが、そのことにより、誰でも、いつでも、どこでも、どんな想いでも始められ、やめることも自由。統制や制約が少ない、ゆるいつながりの環境の中で、人と人のつながりをつくっていく。そんな場所が、「いばしょ」の現実の姿です。

② 「いばしょ」の活動状況

9 割強のほとんどの「いばしょ」において、食事の提供を繋がりツールとして実施しています。さらに 7 割弱が何らかのフードパントリーを実施しています。また 5 割の「いばしょ」は、子どものための場所だけではなく、多世代が交流する場としての価値を提供しています。つまり、今回のアンケート対象となった「いばしょ」の典型的な姿は、食事の提供とフードパントリーを実施し、多世代交流のつながりを作っている場所です。

約 5 割の拠点では、月 1 回程度の開催であり、また多くの拠点が現状実施できている開催頻度で適当と感じています。これは、各「いばしょ」の「身の丈に合った運営」が持続可能な運営のためには大切であるということを示唆しています。

一方で、活動をより拡大したいという意欲のある「いばしょ」においては、開催頻度を増やすための課題解決が必要となっているのも事実です。その場合の課題は、資金の面もありますが、それより深刻なのは、スタッフ・ボランティアの人材確保と会場の確保の問題になっています。「やめたいと思ったことがある理由」でも、「やめずに続けられる理由」でも、トップには「人材のテーマ」が上がってくるのが現状です。

③ 「いばしょ」の運営状況（費用面）

各拠点の資金の必要状況と調達能力は、運営母体の違い（個人か NPO 法人か等）、運営規模の違い、運営組織の違い、運営者の考え方の違い等により大きなばらつきがあります。個人、または企業からの寄付金、行政からの補助金・助成金、支給品等を集める能力は、拠点毎に大きく異なっています。当然のことながら、個人ベースの小規模な拠点ほど、自力での資金調達の難しさがあります。それを補完するために、中間支援団体による支援の意義は大きいと考えられます。

費用の充足感という面では、約 6 割の拠点は、「不足はない」と回答しています。これは身の丈にあった形で、できる範囲でやっているという実態を表していると思われます。一方で「足りない」と回答している拠点が 4 割弱あるのも事実です。個別に見ると、それらの拠点は小規模から大規模まであり、運営規模との因果関係は少ないです。どち

らかと言うと、中規模～大規模拠点で、より積極的に運営規模を拡大したいと考えている拠点に「不足感」を感じている拠点多いという結果になっています。

④ 「いばしょ」の運営者の想い

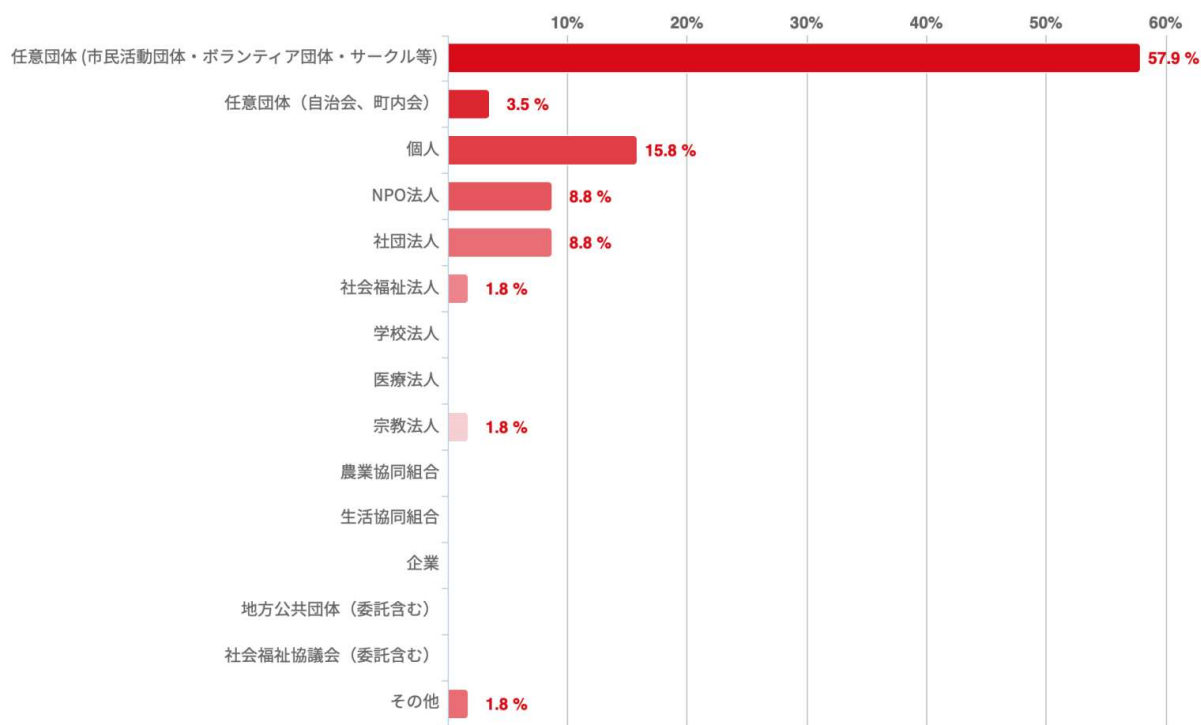
8 割強の拠点では、「やめようと思ったことはない」という回答です。つまり運営者のレベルでは、苦勞よりも喜びが大きく、そのことにより、運営者個人による強い持続可能性が維持されています。

一方で、やめようと思ったことがある拠点が、2 割弱あるのも事実です。その理由として最も多いのが、人材確保の問題(4 割)、会場確保の問題(4 割)、そして資金の問題(2 割)です。つまり「いばしょ」の持続可能性を高めるためには、人材確保の支援が最優先課題です。「やめずに続けられた理由」においても、「スタッフ・ボランティアなど協力してくれる人がいたから」(6 割)、「後押ししてくれる仲間や地域の人があったから」(5 割)となっており、続けていける要素として、ここでも人材の側面が最も大きく影響していることが分かります。

運営者にとって、「いばしょ」を継続することができる最大の力は、やはり「子どもの笑顔」(9 割強)や「利用者からのお礼の言葉」(7 割強)といった「利用者からの喜びのフィードバック」です。運営者の気持ちとしては、「いばしょ」を続けていく中で、人が人をよび、地域の中での人のつながりが増えていくことに喜びを感じています。そして、困っている人とのつながりもでき、その結果として、何らかの支援ができればと考えている運営者の姿があります。

運営者の 9 割強が、活動を続けていく中で、ウェルビーイングが向上したと回答しています。つまり、「いばしょ」では、利用者のウェルビーイングが向上するのみならず、運営者のウェルビーイングも同時に向上する活動である実態が明らかです。まさしく、「いばしょ」エコシステムが形成されていることに、「いばしょ」の特性があり、このことにより、「いばしょ」が地域活性化のベースになっていくと期待されると我々は考えています。

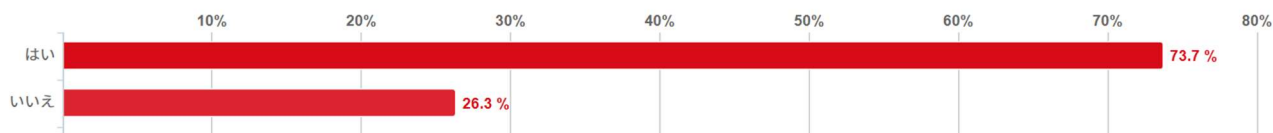
Q2)居場所活動の運営母体で該当するものをお選びください。(回答数:57)



「いばしょ」の運営母体において一番多いのが、市民活動団体やボランティア団体等による任意団体による運営で、58%。次が、個人による運営で 16%。合わせると 74%が個人をベースとしたボランティアによる小規模な運営になっています。

また、ある程度組織的に運営されているNPO法人と社団法人によるものが、それぞれ 9%になっています。多様な運営形態での「いばしょ」のネットワークが構成されていることが、本質的な姿を表しています。

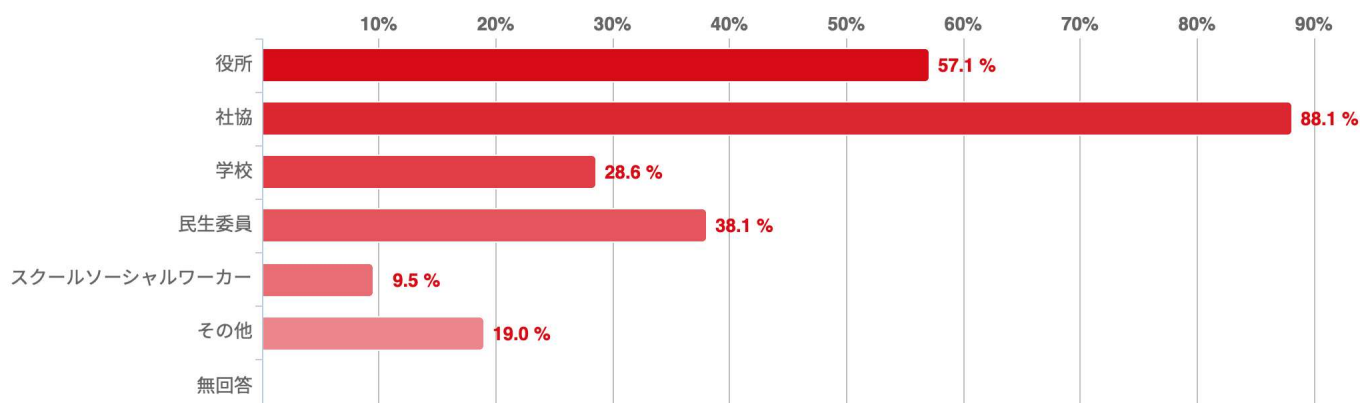
Q3)連携している機関はありますか。(回答数:57)



他の機関(社協、役所、学校等)と連携をして活動をしている「いばしょ」は 74%。逆に言えば、連携することもなく、単独で活動している居場所は 26%にものぼります。まだまだ連携を支援する必要性は高いという背景です。

Q4)前問で「はい」とお答えになった方へ。どの機関と連携を取っていますか。

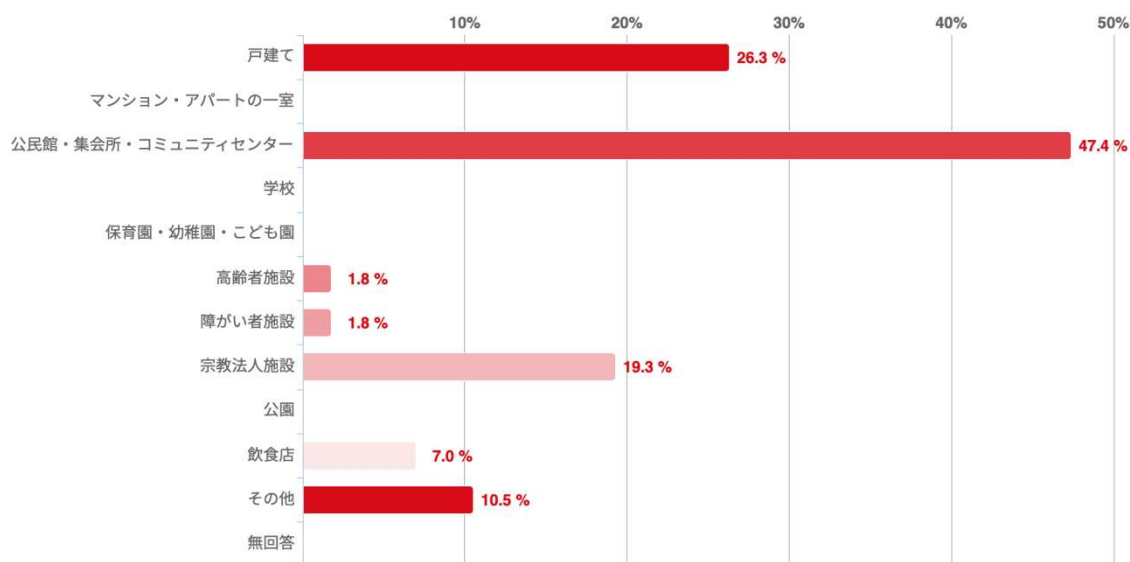
※複数回答可(回答数:42)



他の機関と連携をとっている「いばしょ」のうち 89%が社協とのつながりをもっています。各「いばしょ」にとって社協との連携は非常な重要な要素になっています。次に役所(行政)との連携が57%です。行政からの補助金、助成金の支援やその他、行政サービスの支援をうけている居場所も多くありますが、まったく行政とのつながりがない居場所も43%ちかくあるのが実態です。つまり行政との連携に関しては2極分化していると言えます。

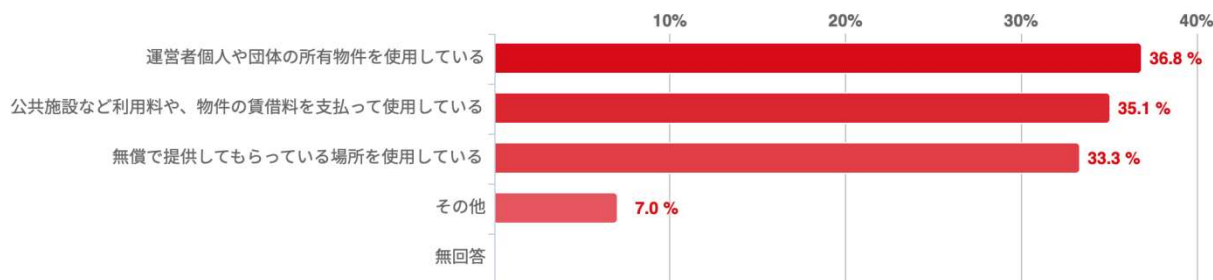
居場所の活動においては、各居場所単独の活動だけではなく、他の機関や団体との多様な「つながり」がとても重要です。そのためにも県内の居場所ネットワーク全体として、各居場所が多様な「つながり」を持てるように支援していくことがとても大切だと考えています。

Q5)居場所を開催している場所をお選びください。複数個所で開催の場合は、該当する場所を全てお選びください。(回答数:57)



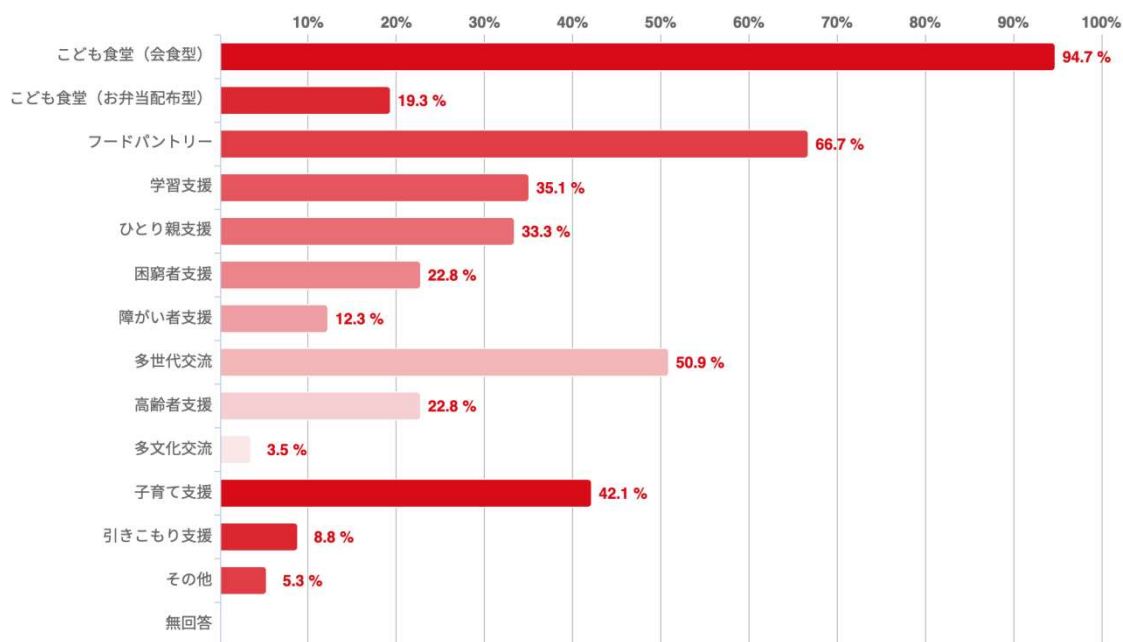
「いばしょ」の開催場所として最も多いのが、公民館・集会所・コミュニティセンター等の公共関連の施設の利用が48%です。持続可能な「いばしょ」運営において、「いばしょ」の開催場所の確保が最大の課題になっている背景です。

Q7)居場所活動の場所の使用状況を教えてください。※複数回答可(回答数:57)



運営者個人や団体の所有物件が37%。無償で提供してもらっている開催場所が33%。賃貸料を支払って、会場を借りて運営しているのが35%。運営会場の確保とその資金的支援が非常に重要な背景です。

Q8)現在の居場所の活動内容を教えてください。※複数回答可(回答数:57)

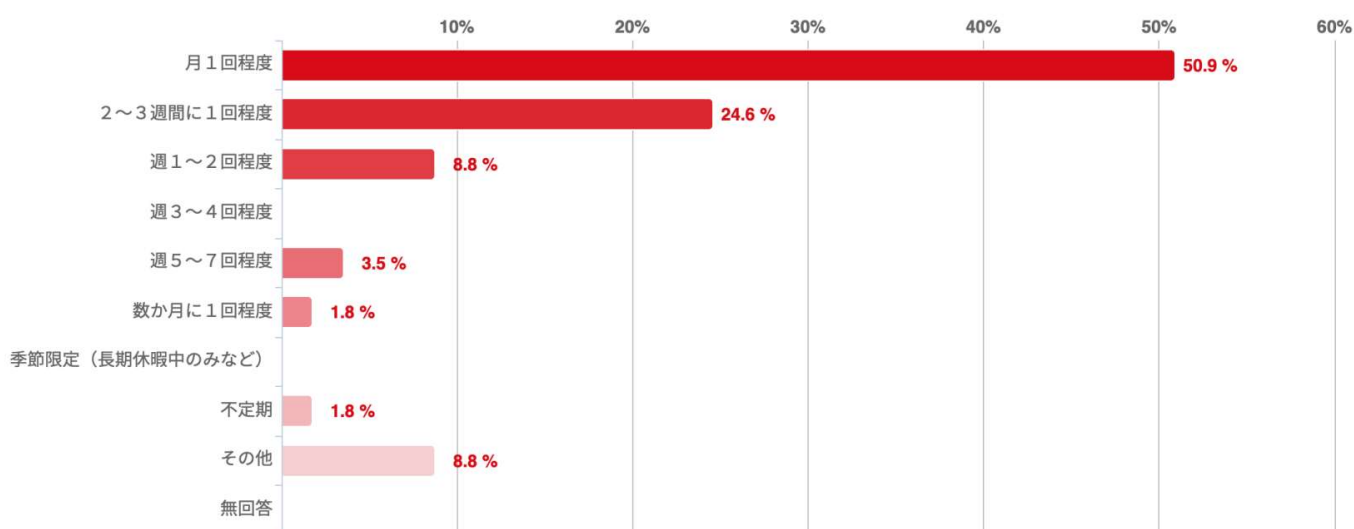


95%の「いばしょ」において、子ども食堂(会食型・お弁当配布型)、を実施しています。また 67%の「いばしょ」において、フードパントリーを実施しています。つまり、ほとんどの「いばしょ」において、食事の提供を繋がりツールとして実施しています。

また 51%の「いばしょ」において、多世代交流を実施しています。つまり、「いばしょ」は、子どものための場所だけではなく、半数近くの「いばしょ」が、多世代が交流する場としての価値を提供しているというのが実態です。(食事＋多世代交流)以外の活動としては、子育て支援(42%)、学習支援(35%)、ひとり親支援(33%)、困窮者支援(23%)、高齢者支援(23%)となっています。つまり、約 3 分の 1 の「いばしょ」においては、食事の提供以外のさまざまな支援を付加して活動をしているのが実態です。

子ども食堂をメインとして、その他の支援を行うタイプ(多機能型子ども食堂)と、その他の支援をメインとして、その補完として食事の提供もしているタイプ(子ども食堂補完型)があります。詳細については、「休眠事業 愛知こども応援プロジェクト報告書」の中の「いばしょプロファイル分析」を参照してください。

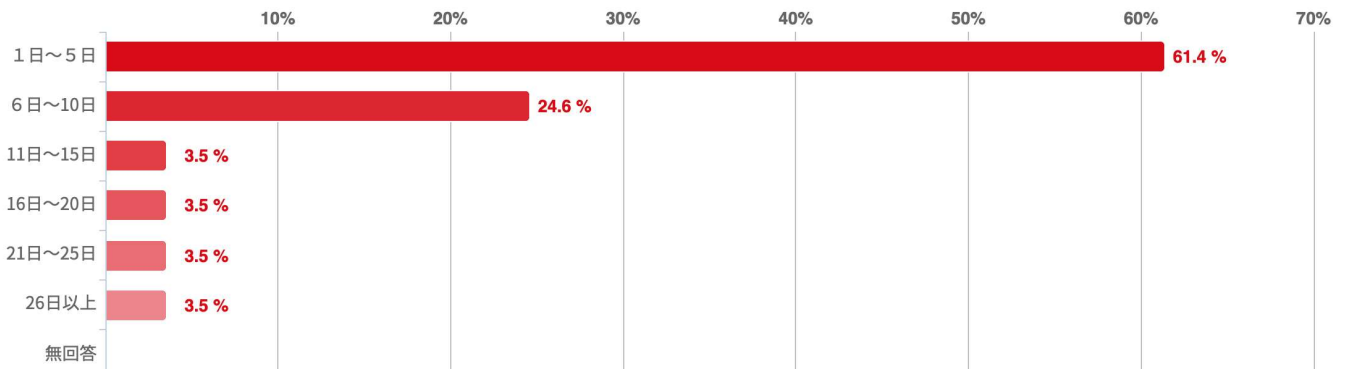
Q9)居場所活動の開催頻度を教えてください。(回答数:57)



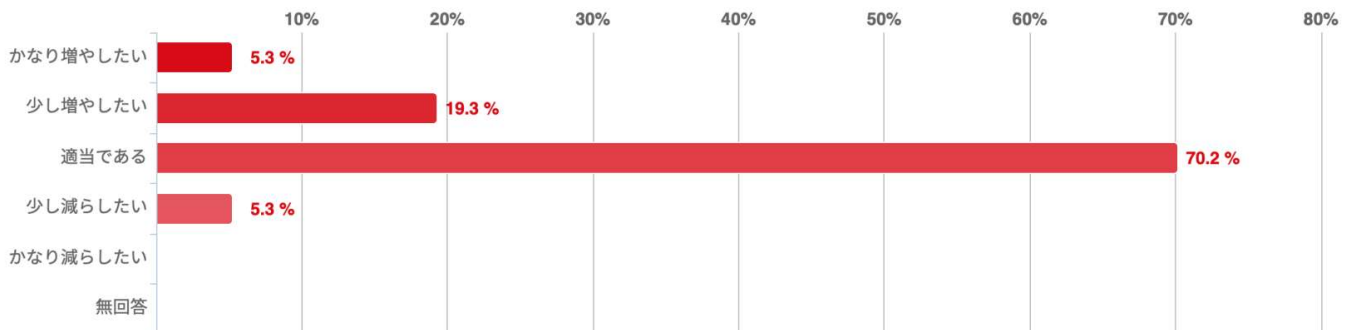
月 1 回程度の開催が 51%、2～3 週間に 1 回程度の開催が 25%です。つまり、小規模な「いばしょ」が多い中で、月 1 回程度の開催というのが、各拠点における現実的な実施力であるということを表しています。

Q10)1回の居場所開催のための準備等についてお聞きます。

買い出し・広報・事務作業等の日数はどれくらいありますか？(回答数:57)



Q11)開催頻度の充足感はいかがですか？(回答数:57)



Q12)前問の「開催頻度の充足感はいかがですか？」で〈増やしたい〉もしくは〈減らしたい〉と回答した理由を教えてください。

【増やしたいポジティブな理由】

- 地域の方からのニーズがあるから。障害福祉の事業を展開しているため、工賃アップに繋げたい。
- 特に増やしたいと思う内容は、フードパントリーやお弁当です。理由は、食事は毎日のことだからです。
- 現在、月に1回土曜日の昼食時に開催しているが、平日の夕食時の開催を希望される利用者もいらっしゃるため、開催頻度を増やすことも検討している。
- 開催日数は出来ればもう少し増やし、定期的に行えば地域に定着した活動になると思います。それが継続に繋がるのではないかと考えております。
- 各利用者さんに適した日では無いと思うので、回数を増やす事により支援範囲が広がる。
- いつでも気軽に来られる場所にしたい。
- 月に1回の開催で、子どもの貧困を救えると思ってないので。
- 食事の回数を増やしたい。
- 登校拒否児童の居場所を作りたい。
- 支援というには足りないと思うから。
- 参加者が増え、一人ひとりと関わる時間が薄まる。
- 人々の社会的孤立化の中、もっと繋がりがあると良いと思う。
- 夏休み、冬休み、春休みに保護者が働いているために要望が有ります。

【減らしたいと考える理由】

- 出来たら維持したいけれど利用人数も増えていて、運営サイドの体力が続かないのではと不安です。
- スタッフの高齢化。
- 支援品減少の為、1世帯への配布品が減少気味になってきています。食品減少に伴い、イベントなどで楽しんでもらえるようにしていますが、参加される親御さんも仕事や家の事、子供の行事など時間に余裕が無いとの理由で参加できない方も多数お見かけするようになってきました。私自身も仕事の都合で、活動の時間を作るのが厳しい状況も出てきて悩んでいます。
- 増やしたい気持ちはあるが、ボランティアであり、仕事をしながらなので現実的には難しい。月に2回でも精一杯。

Q13)開催頻度を増やす、もしくは減らすために必要だと思うことは何ですか？

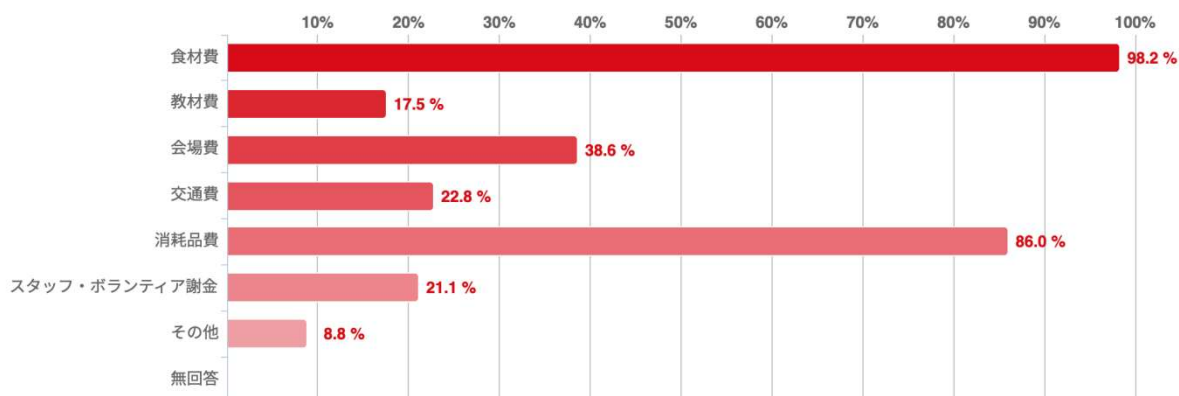
- 食材の確保。食材に係る費用を抑える。マンパワー。
- 支援の方法の見直しと、ボランティアの配置の工夫。
- 食材費・ボランティアスタッフ・食糧の支援があれば増やすことが可能です。
- 手伝ってくださる方(人手)、食材費。
- 他に行ける場所を紹介できる子ども食堂が必要。
- 今利用している会場はとても利用団体が多く、特定日がなかなか取れないので、その問題を解決する。
また、ボランティアスタッフの定期的な参加が確実に出来ることが望まれます。
- ボランティアさんを増やす、利用施設の条件クリア、費用。
- ボランティアさんに食品等の引き取りをお手伝いしていただいたり、行政の助けがあると助かります。
ボランティアさんも仕事をしており、時間的に難しかったり、重い物が運べなかったりで現状できていません。
- 時間とお金。
- やる気のある人を育てること。
- 人件費など、活動が仕事になること。
- 材料費や光熱費などの資金、スタッフ。
- 国や自治体の資金補助。
- 財源。
- 開催場所と運営スタッフの確保。
- ボランティアスタッフ、資金。
- 開催費用と支援品の確保が必要です。

Q10、Q11、Q12、Q13について

開催頻度については、70%が適当であるという回答です。つまり、多くの「いばしょ」が現状実施できている開催頻度で適当と感じています。各「いばしょ」の「身の丈に合った運営」が大切であるということを意味していると考えられます。

一方で、増やしたいと考えている「いばしょ」も 25%程度あります。その主な理由は、やはり、利用者のニーズに応じてあげたいという拠点運営者の熱い思いです。しかしながら、そのために必要だと感じていることは、資金の面もありますが、それよりも重要なのは、人材と会場手配の問題になっています。特にボランティアを含めた人的支援不足がボトルネックになって、開催頻度を増やしたくても増やせないという現場の実態です。

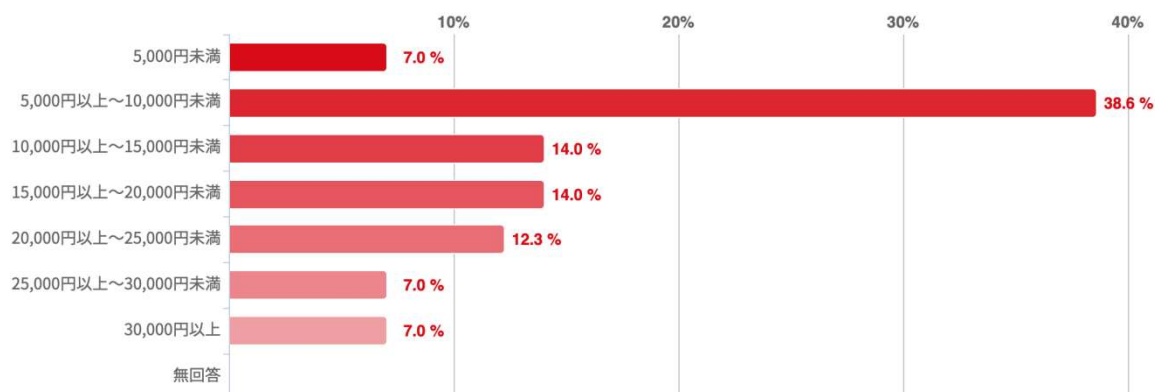
Q14)居場所運営に必要な費用はどのようなものですか？
該当するものをお選びください。※複数回答可(回答数:57)



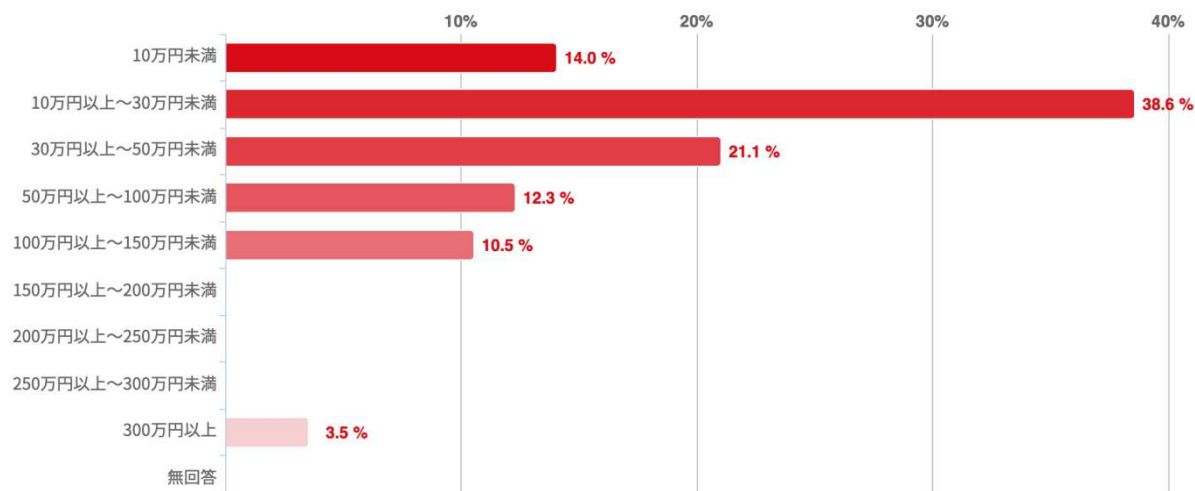
居場所運営に必要な最大の費用としては、食材費(98%の拠点が必要と回答)、消耗品費(86%)になります。次に大きいのが会場費(39%)です。スタッフ・ボランティア謝金や交通費といった人に関連する費用については、20%程度の拠点が必要と回答しています。

95%の「いばしょ」が食事の提供をしているという実態の中で、やはり食材費の確保が一番の課題になっています。食材費の支援は、中間支援団体が支援する意義が大きいと考えます。

Q15)1回の居場所活動開催に、平均するとどのくらいの費用がかかっていますか？
該当するものをお選びください。(回答数:57)



Q16)1年間の居場所活動に、どのくらいの費用がかかっていますか？
該当するものをお選びください。(回答数:57)

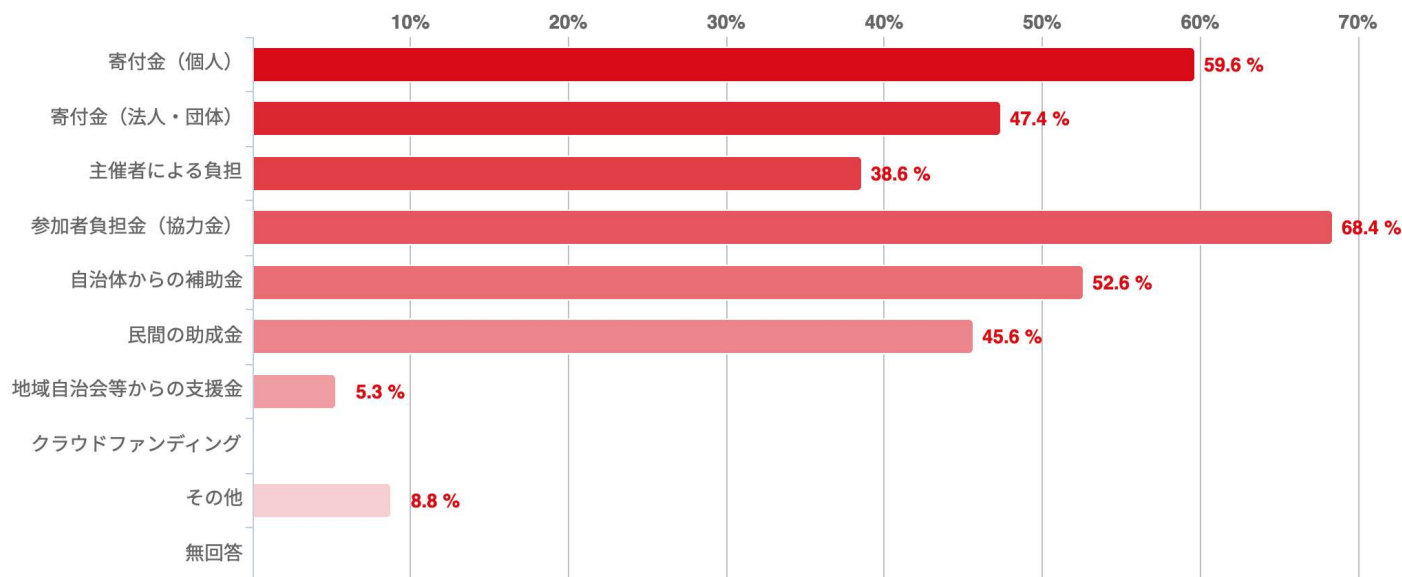


Q15、Q16 について

1 年間当り 10 万円以下の小規模拠点(14%)から、10 万円～50 万円の中規模拠点(39%+21%)、50 万円～150 万円の大規模拠点(12%+11%)、300 万円以上の超大規模拠点(4%)まで、さまざまな規模の「いばしょ」が運営されています。平均的なイメージとしては、1 回当り 5,000～10,000 円で、1 年間当り 10 万円～30 万円になっていますが、規模のばらつきが大きいという多様性の中で、活動にかかっている費用も大きくばらついています。

Q17)居場所運営に必要な財源をどのように賄っていますか？

該当するものをお選びください。※複数回答可(回答数:57)

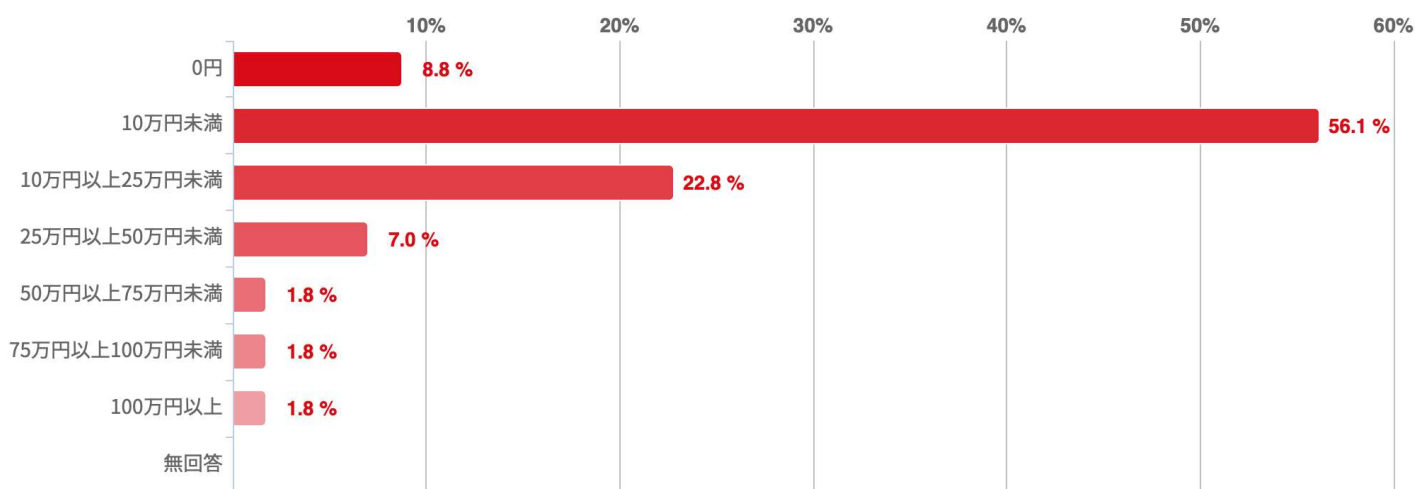


各「いばしょ」は、活動に必要な費用をさまざまな財源から調達しています。回答数の多い順番としては、①参加者負担金(68%) ②寄付金(個人)(60%)③自治体からの補助金(53%) ④寄付金(法人・団体)(47%)⑤民間の助成金(46%)⑥主催者による負担(39%)となっています。但し、調達状況に関しては、運営母体の違い(個人か NPO 法人か等)、運営規模の違い、運営組織の違い、運営者の考え方の違い等により、拠点毎に状況は大きく異なります。

Q18)補助金や助成金を除いた寄付金についてお伺いします。

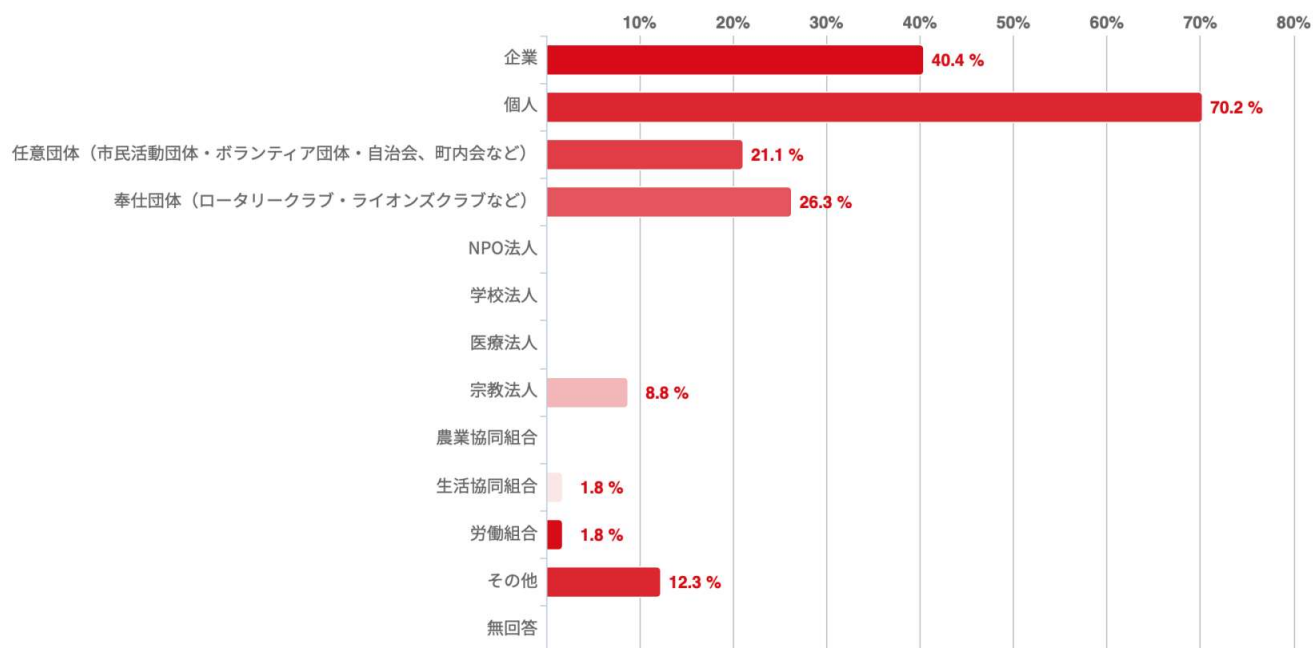
1年間でお受け取りになった寄付金額はどのくらいになりますか？

該当するものをお選びください。(回答数:57)



Q19)寄付者はどのような方々ですか？ 該当するものをお選びください。

※複数回答可(回答数:57)



Q18、Q19 について

1 年間に受け取っている寄付金額の規模としては、

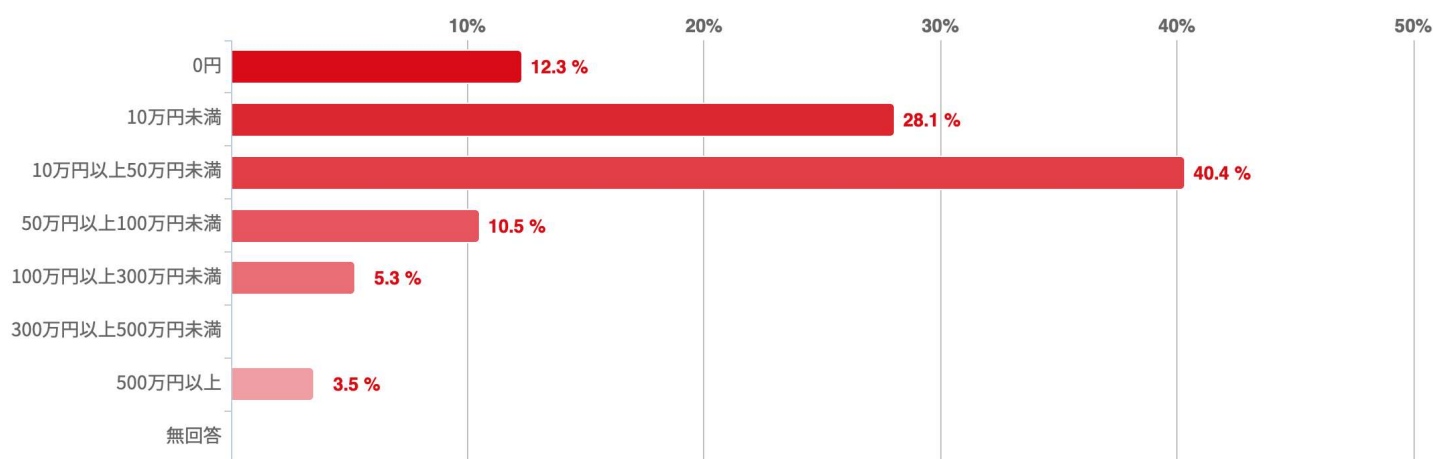
小規模(10 万円未満)(9%+56%)中規模(10 万円～25 万円)(23%)大規模(25 万円～50 万円)(7%)超大規模(50 万円以上)(5%)となっています。

寄付金を集める能力についても、拠点毎のばらつきは大きいです。特に企業からの寄付金を集めるとなると、小規模拠点においては限界があるのが実態です。企業からの寄付金については、中間支援団体が支援する意義が大きいと考えます。

Q20)寄付金を除いた補助金や助成金についてお伺いします。

1年間でお受け取りになった補助金額や助成金額はどのくらいになりますか？

(回答数:57)



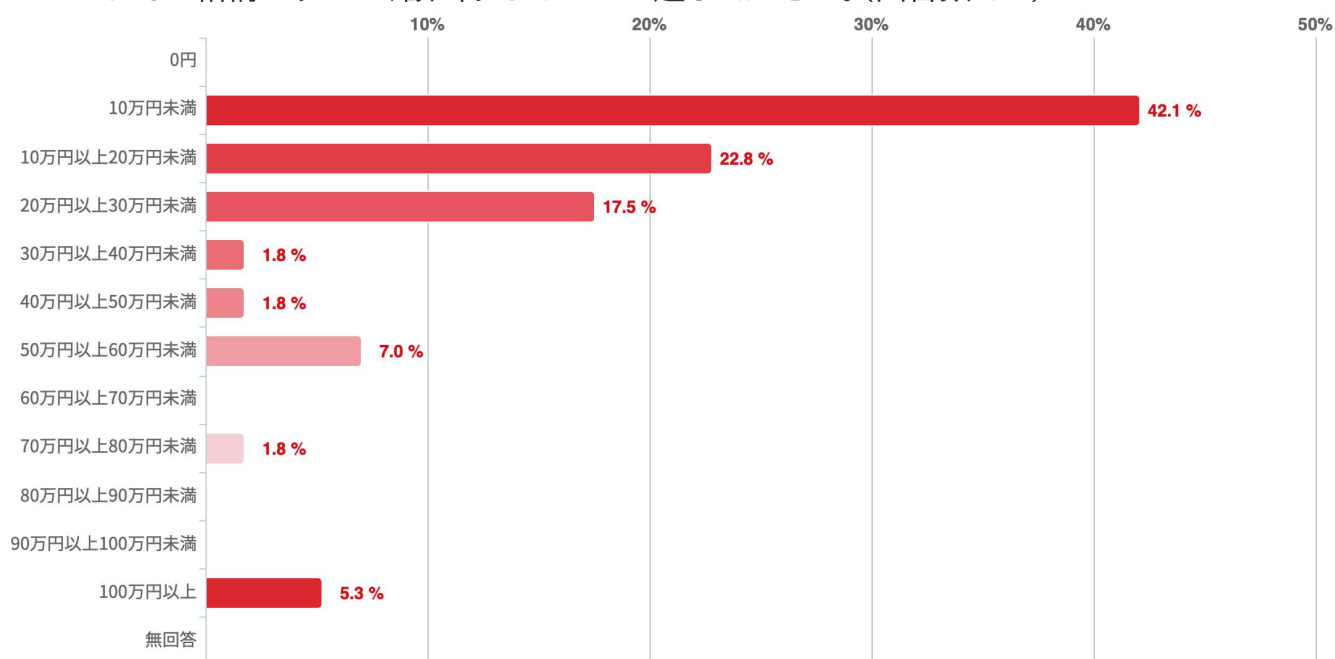
1 年間に受け取っている補助金・助成金額の規模としては、小規模(10 万円未満)(12%+28%)中規模(10 万円～50 万円)(40%)大規模(50 万円～100 万円)(11%+5%)超大規模(500 万円以上)(4%)となっています。

補助金・助成金を集める能力についても、拠点毎のばらつきは大きいです。特に個人ベースの小規模拠点にとっては、補助金・助成金の申請から取得、報告のハードルが高いのが実態です。

Q21)1年間にお受け取りになる「支援品」についてお伺いします。

支援品を金額に換算すると、おいくらぐらいになるとお考えですか？

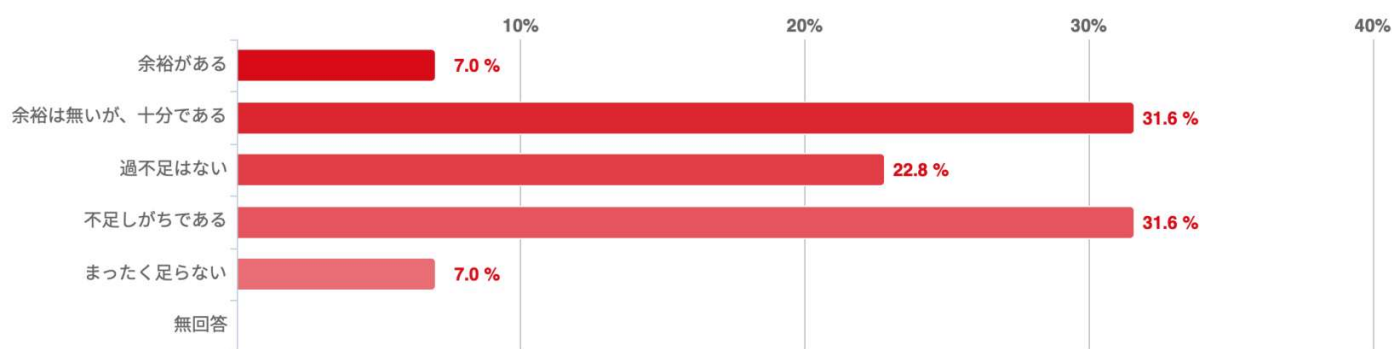
おおよそで結構ですので、該当するものをお選びください。(回答数:57)



1 年間に受け取っている支給品金額換算の規模としては、小規模(10 万円未満)(42%)中規模(10 万円～20 万円)(23%)大規模(20 万円～50 万円)(18%+2%+2%)超大規模(50 万円以上)(7%+2%+5%)となっています。

支給品を集める能力についても、拠点毎のばらつきは大きいです。それを補完するために、中間支援団体や地域支援団体との連携が重要になると考えています。

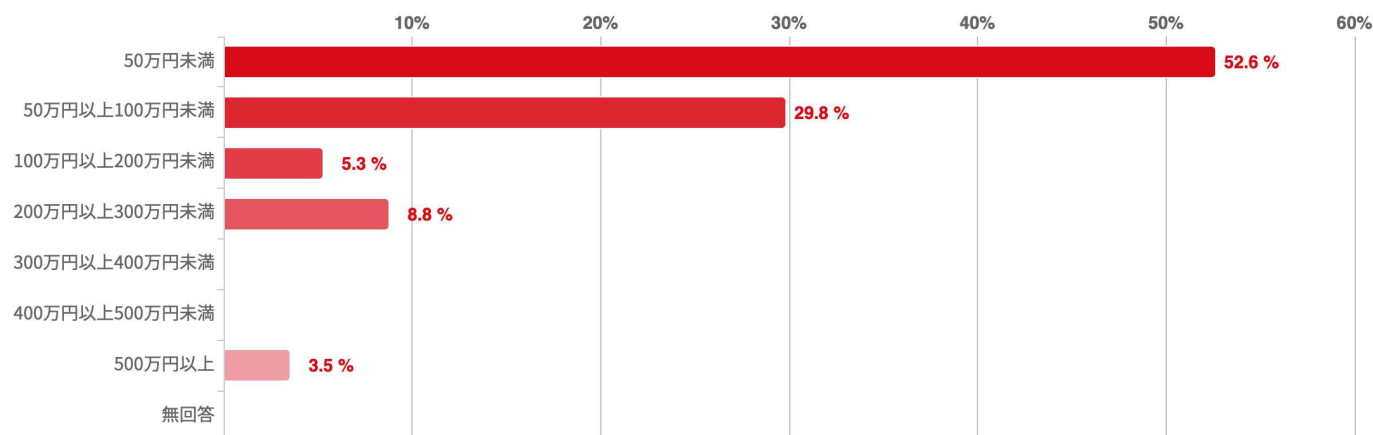
Q22)必要な費用の充足感についてお伺いします。該当するものをお選びください。(回答数:57)



① 余裕がある(7%) ②余裕は無いが、十分である(32%) ③過不足はない(23%)を合わせると、62%となります。つまり約 6 割の拠点は、できる範囲でやっており、費用面での悩みは比較的小さいのが実態です。

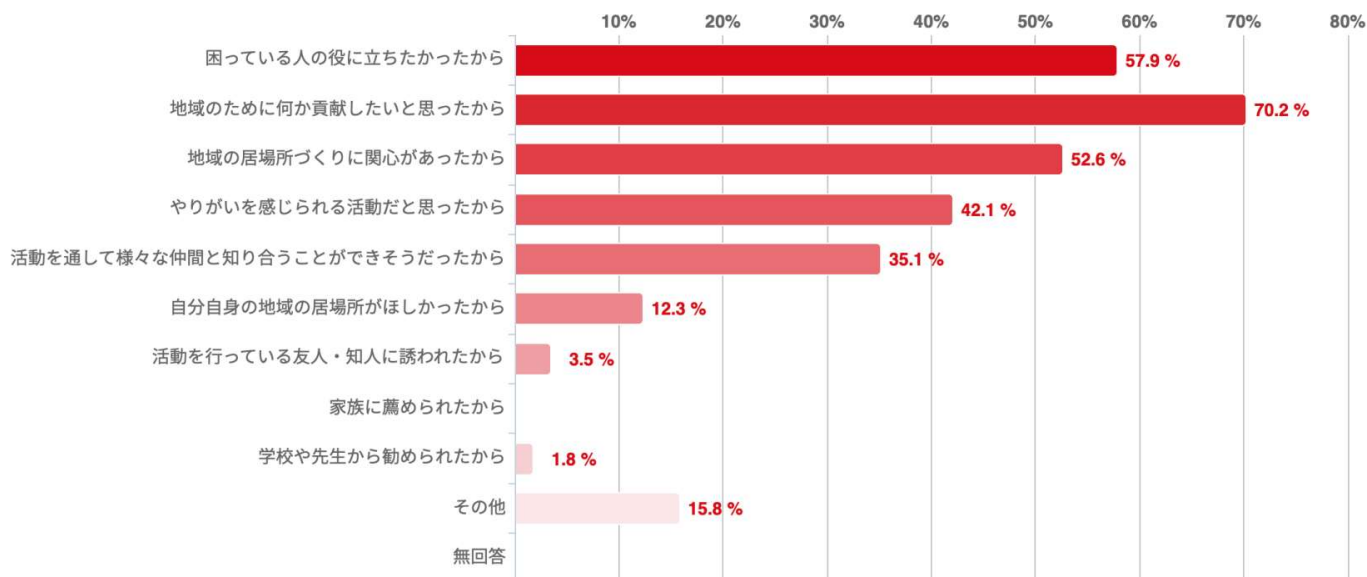
一方で、④不足しがちである(32%) ⑤まったく足りない(7%)と回答している拠点があるのも事実です。個別に見ると、それらの拠点は小規模から大規模まであり、運営規模との因果関係は少ない。どちらかと言うと、中規模～大規模拠点で、より運営規模を拡大したいと考えている拠点多いのが実態です。

Q23)居場所活動を継続するために、1年間にどれくらいの費用が必要だとお考えですか？該当するものをお選びください。(回答数:57)



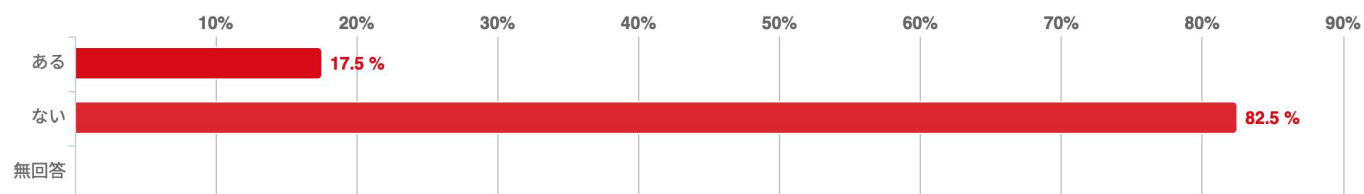
活動を継続するために、1年間に必要な費用の規模としては、小規模(50万円未満)(53%)中規模(50万円～100万円)(30%)大規模(100万円～200万円)(5%)超大規模(200万円以上)(9%+4%)となっています。どの拠点も、現在かかっている費用(Q15/Q16 参照)よりも、活動を継続するために必要と考えている費用は大きいと回答しています。おおよそ現在かかっている費用の倍ぐらいたれば望ましいというイメージです。このことと、費用の充足感の回答(Q22 参照)を合わせて考えると、現状では、できる範囲で運営しているので、費用は足りていると感じているが、やれるものであれば、今よりも費用を増やして、活動をしていきたいと考えているのが実態ではないでしょうか。

Q24)居場所活動を始めたきっかけは何ですか？ 該当するものをお選びください。
※複数回答可(回答数:57)

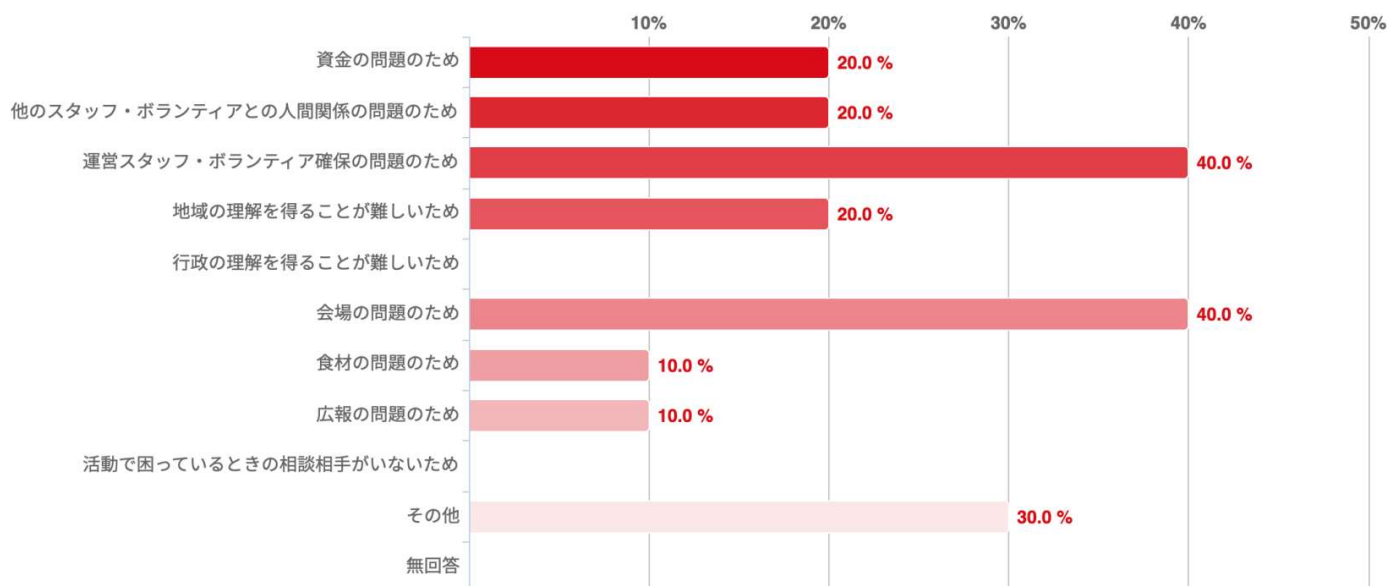


多い回答は、地域に貢献したい(70%)、地域の居場所作りに関心がある(53%)、困っている人の役に立ちたい(58%)となっていますが、個別に各「いばしょ」の実態をみると、各拠点により、運営者の想いはとても多様です。

Q25)居場所活動をやめようと思ったことがありますか？(回答数:57)



Q26)前問で“はい”と答えた方に、居場所活動をやめようと思った理由は何ですか？ 該当するものをお選びください。※複数回答可(回答数:10)

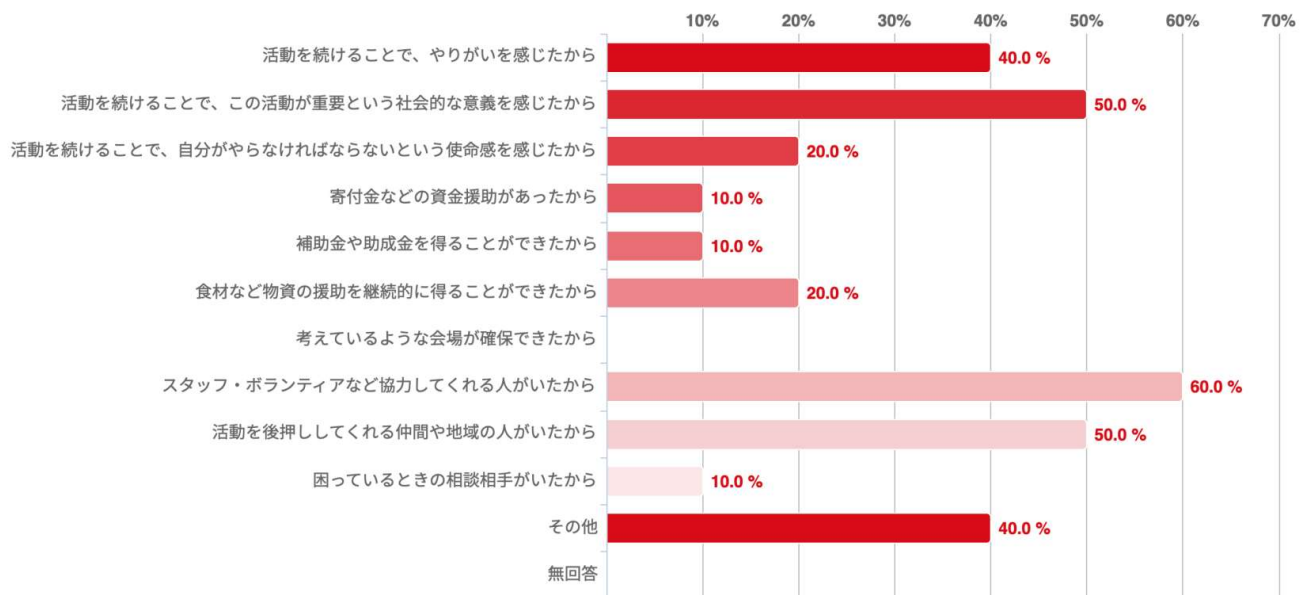


Q25、Q26 について

83%の拠点では、やめようと思ったことはありませんと回答しています。つまり運営者の個人の想いレベルでは、持続可能性という面では強いという特性を持っていると言えます。

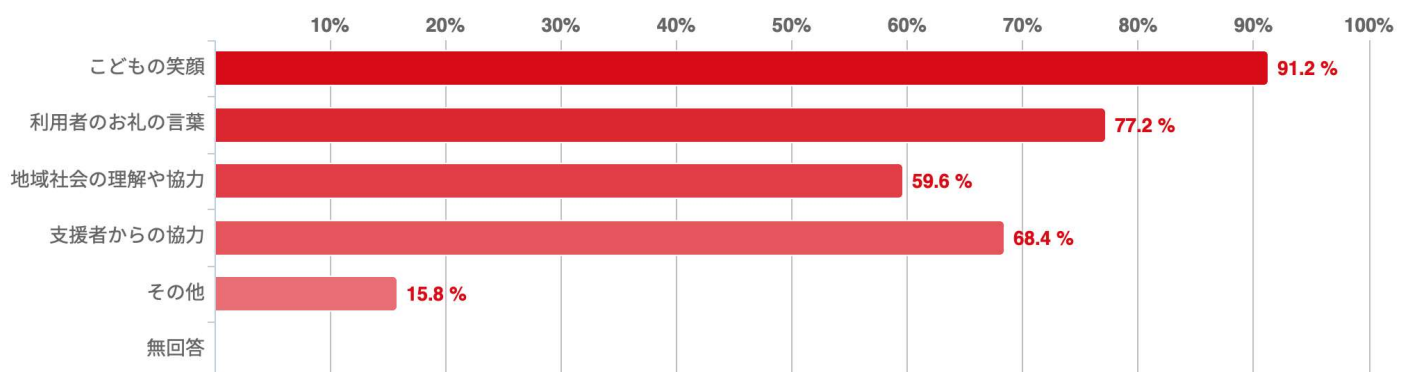
一方で、やめようと思ったことがある拠点が、17%あるのも事実です。その理由として最も多いのが、① 運営スタッフ・ボランティア確保の問題(40%)、② 会場確保の問題(40%)となっており、資金の問題(20%)よりも深刻であるのが実態です。つまり「いばしょ」の持続可能性を高めるためには、人材確保の支援が最優先課題であるというのが実態です。

Q27)居場所活動をやめずに続けられた理由は何ですか？
該当するものをお選びください。※複数回答可(回答数:10)



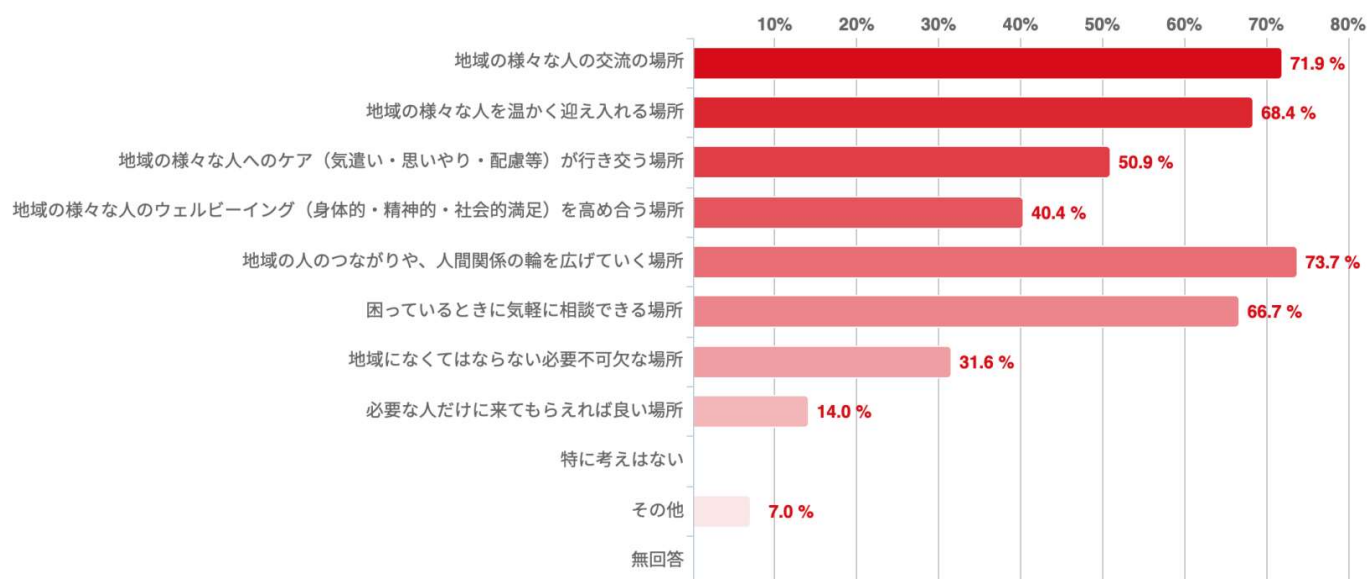
多い回答は、① スタッフ・ボランティアなど協力してくれる人がいたから(60%)、② 社会的意義を感じたから(50%)、③ 後押ししてくれる仲間や地域の人があったから(50%)となっており、続けていける要素として、ここでも人材確保の側面が大きく影響していることが分かります。

Q28)居場所活動を継続する力となっているものは何ですか？
該当するものをお選びください。※複数回答可(回答数:57)



ほとんどの拠点が、① 子どもの笑顔(91%)、② 利用者のお礼の言葉(78%)と答えています。やはり利用者からの喜びのフィードバックが、継続する最大の力であるということです。次に、③ 支援者からの協力(68%)、④ 地域社会の理解や協力(60%)となっています。つまり、利用者のウェルビーイングのみならず、同時に運営者のウェルビーイングが向上していくことが最も強い継続の力になっているということを意味しています。

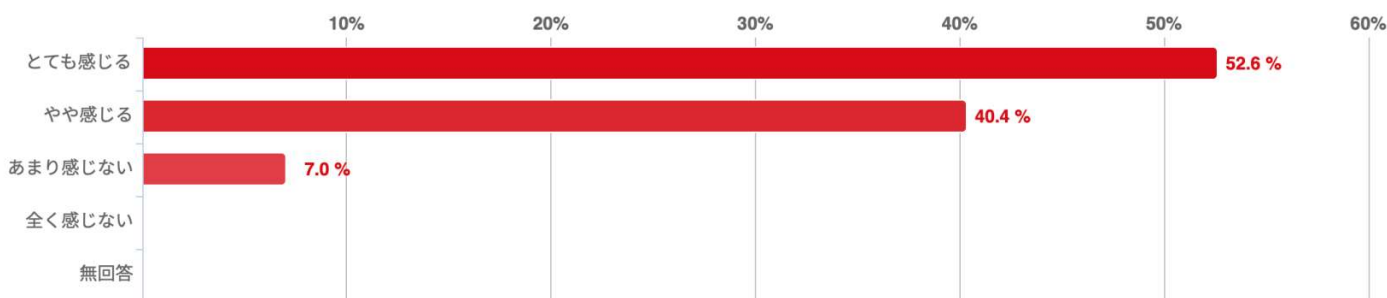
Q29)地域社会の中で、あなたが運営している居場所はどのような場所でありたいと考えていますか？ ※複数回答可(回答数:57)



多い回答は、① 地域の人のつながりや、人間関係の輪を広げていく場所(74%)、② 地域の様々な人の交流の場所(72%)、③ 地域のさまざまな人を温かく迎え入れる場所(68%)、④ 困っているときに気軽に相談できる場所(67%)となっています。

運営者の気持ちとしては、「いばしょ」を続けていく中で、人が人をよび、地域の中での人のつながりが増えていくことに喜びを感じています。そして、困っている人とのつながりもでき、その結果として、何らかの支援ができればと考えている運営者が多いのが実態です。

Q30)居場所を始める前と後で、あなた自身のウェルビーイング(身体的・精神的・社会的に満たされた状態)が向上したと感じますか？(回答数:57)



① とても感じる(53%)、② やや感じる(40%)を合わせると 93%がウェルビーイングが向上したと回答しています。つまり、「いばしょ」では、利用者のウェルビーイングが向上するのみならず、運営者のウェルビーイングも同時に向上する活動であり、まさに「いばしょ」エコシステムを形成していることに意義があると我々は考えています。

Q31)居場所の意義を広く地域社会に伝えるために、利用者とのつながりや利用者の変化などのエピソード、居場所活動をやっていて嬉しかったこと、協力して欲しいことなどがありましたらご自由にお書きください。(任意回答)

- いまだに子ども食堂は『貧困家庭』『子どもだけ』『ハンディのある方だけ』といったイメージが強くあるため、誰もが気楽に立ち寄れる場所として浸透してもらいたい。
- 子育て応援をまず一つの目的として始めました。小さなお子様をお育て中の方々に、少しでもゆっくりご飯を食べてもらいたい。この活動をお知りになり、毎回ご予約をいただいている方もおられます。
また、いつも1人でご飯を食べている年配の方々には、お礼と共に労いのお言葉もいっぱい頂いております。スタッフ一同とても励みになっております。中には、食材の協力と、何が必要？いるものを畑でつくるよと。小学生の子ども達がこの様な活動に興味を示して、お手伝いスタッフとして手伝ってくれてます。とても嬉しいです。
- 子どもや大人に何かを教えてもらえるようなボランティアの協力が欲しい。
- 支援者には、必ず謝意や現状をきめ細かく伝えていくことが大切。社会にも知ってもらう為に、しっかりと発信する事が重要。
- まだプレ開催のみでオープン準備をしているところなので、本当に経験としては少ないのですが、シングルのご家庭のお母さんと小学生の息子さんが来てくださって、終始笑顔で、みんながいなくなる最後までずっと喜んで過ごしておられたことがとても印象に残っています。お母さんとお話すると、「忙しくてお出かけにはなかなか連れてってやれないし、外食はお金がかかるので、こういったところは本当に助かります」とおっしゃってました。いただいたものを多めにお渡しできて感謝でした。
- 最初は反発していたお子さんも、スタッフと交流を重ねるたびに笑顔と笑いを取り戻していき、色々な事を相談するまでになりました。
「美味しい、おかわり」と、言って沢山食べて帰る時、台所まで来て「美味しかった、ありがとう」と言って帰るお子さんがいます。保護者として同行した、おばあちゃんが「家では、いつもこんなに沢山食べないんですよ。おかわりするなんてビックリです」と、笑顔と涙目で帰って行きました。
- 当子ども食堂では、どんな子どもにも明るい未来を繋げるため、体験を重視した活動を行っています。活動内容の中で特に感じた子どもたちの変化や嬉しかったことは以下の通りです。
 - ✓体験型こども食堂…「お手伝いができるようになった」「嫌いな食べ物が食べられるようになった」など、子どもたちの成長が見られて嬉しい！
 - ✓未来応援体験…学習、ものづくり、スポーツ、農業、親子体験などを通じ、社会理解や主体性が育成。
子どもたち：「障がいを持つ子への接し方がわかった」「食べ物の大切さを知った」「野菜ってこうやって作るんだ」と生産者への感謝が生まれていて嬉しい！
ものづくりが好きな子がいて、家で作った、手作りのモップなどを「これ私が作ったの～!!」と笑顔でプレゼントしてくれたというエピソードもありました。
保護者：「子どもの主体性が育った」「障害持ちでも安心して社会体験をさせられる」と大変好評で嬉しいです！
 - ✓管理栄養士監修の弁当…栄養バランスが整った弁当に食育クイズを添えて提供している弁当では、「子どもが食べ物に興味を持ってくれた」「親子で栄養の知識が増えた」「楽しく学べる」と喜びの声が寄せられています。
 - ✓フードパントリーでは、毎月お米をご寄付してくださっているおかげで、保護者からは「子どもに思う存分お米を食べさせてあげられるようになっています。」と喜びの声が たくさん寄せられています。
 - ✓協力して欲しいこと…いつもご支援くださり心から感謝を申し上げます。お陰様で親子の笑顔が増えていると実感しています!!
お米などの主食も大変有難いですが、継続して活動していくためには資金や気軽に参加いただけるボランティアさんのご協力が必要不可欠です。ご協力いただけますと幸いです。
- 利用者の割合としては、学区内の子育て世帯よりも利用者の口コミで広まり、他学区から来てくださる方が多い。必要な人が必要な人に繋がっていると感じている。

利用者から子ども食堂へ来る目的として耳にするのは「児童館のように土日に子供を遊ばせられる」「土日の昼食を作らなくて済むから楽」「配布食品を沢山もらえるから家計的に助かる」という声が多い。

主催者側が想定していた利用者層や利用目的を超えるものも多くあり驚いている。必要と感じる人に必要なとき来てもらえたらそれで充分と考え活動している。

- 対象地域が広く、親子での参加なので保護者とも信頼関係が築けて、援助の方法もわかりやすいのでよかったと思います（保護者に直接助言できる）。
- 5年目となりましたが、始めた頃は利用者も少なく、地域の理解も得られませんでした。続けていくうちに活動の輪が広がっています。昨年から餅つき会も始めました。利用者さんも人とのふれ合いを求めています。そこに美味しい食事があり、ホッと一息できる場所が必ずある安心感を感じて貰っていると思います。月1回なので、負担なく自分も楽しめています。これからもご支援をご期待申し上げます。
- 一度参加して頂いた皆さまが、次回また次回とつながっていることを実感しております。興味本位で参加していたのが、平静かつ穏やかに、そして気軽に参加してくれることが願いです。ご支援がなにより助かります。支えになっております。
- 地域の清掃活動に子どもを連れて参加した時、地域の人からかけられる言葉の温かさに感動します。
- 来てくださる保護者さんからは感謝の言葉がある。活動時にも協力してくださる（参加者）。3年目になり、地域の方からの支援も増えました。
- お子様が温かいご飯を笑顔で食べられる環境が作りたかったのですが、今ではお母様達の息抜きの場所などになってる気がします。1人では開催できないので、スタッフやボランティアさんに助けて頂きながら月一回ですが、そんな環境をずっと続けられたらいいと思います。
- 1. 利用者とのつながりや変化のエピソード
初めて来たときは緊張していた子が、何度も通ううちに笑顔で挨拶してくれたり、リクエストを伝えてくれるようになった。大人に話かける勇氣を持ってくれた。また、こども食堂で異なる年齢の友達を作り、毎回楽しみにしてくれている。
- 2. 活動をやっている嬉しかったこと
子どもたちが「また来たい！いつもありがとう！」と言ってくれたこと。ボランティアの中高生が「将来は自分が子ども食堂の代表を引き継ぎたい」と言ってくれたこと。地域の方がお野菜やお米などを寄付してくださり、支え合いの輪が広がっていること。
- 3. 協力してほしいこと
食材や文房具や支援金の寄付。地域の方にもっと知ってもらうためのPR 協力。
- 参加者から温かい言葉がある時。
- 親御さんがお礼に来てくれたり警察に引き継いだりと、やってる意味はあるのかなと思います。
- 食堂を始めて10年目になります。コロナ以前は会食形式で50人ほどの参加者でしたが、コロナ中の4年間はお弁当を100食ほど配布しました。待っている家族の分だと思えます。誰でも参加できる食堂と謳っていても、会食だと来れない人がこんなにいたとは、と驚きました。集まって食事することは結構なハードルがあるのですね。現在は会食復活で40人ほどの参加者です。フードパントリーを行うとさらに増えます。みんな厳しい物価高にあえいでいますが、この活動で多くの方々の笑顔が見られることがうれしいです。
- 利用者とのつながりが徐々に出来てきて、イベント等を手伝ってもらえたり、子ども達とのつながりも深くなってきたと思える。又、地域に浸透しつつあり、広がりも見られるようになったと感じる。
- Instagramの担当をしています。Instagramを見て来てくれたり、ボランティアに来てくれたりするのが嬉しいです。
- 利用者との信頼関係が構築され、各々、家庭での生活課題が見出された時に一緒に考えたり、解決に向かうきっかけができたりと利用者に寄り添えるようになった時、笑顔が垣間見えるようになりました。子どもと時間を共有する中に、子どもにとっての安心感が培われたような感じがありました。
- 2024年11月にこども食堂、ママカフェ、高齢者サロンを同時にオープンしました。高齢者サロンでこども食堂のご案内をしたところ、一人暮らしの高齢者5名がこども食堂に参加され、子どもや赤ちゃんとふれあい、とても喜んでくださり、それを見守る周りの方々からも笑顔がたくさん生まれました。

2月17日は初めてのママカフェと高齢者サロンを同時に開催します。多世代交流の居場所として、地域の皆さんが気軽に集まることができ、仲良く支え合える温かい場所を目指して活動していきます！

- 私どもは生活困窮やひとり親家庭などに絞っているため 誰でもという感じではない。
- この活動を始める前まではこんなに多くの方のご支援がいただけとは思ってもなく、たくさんの方々からの温かい応援に感謝しています。SNS で活動の報告をマメにすることで、見ず知らずの方からのご支援をいただき、ありがたいです。毎回の食事を食べての感想も嬉しいですし、色々質問されたことにお応えすることでつながりも強くなって、皆さんが喜んでくださっていることを感じます。
- 孤立しがちな人達が集まってワイワイガヤガヤ料理を作って会食して、お弁当を作って、とても活気があって楽しく賑やかな場所です。子ども達にとっても大人達にとっても実家に帰ってきたようなホッとする場所になっています。
- 私たちが行なっている子ども食堂に集う子どもたちは、どの子も貧困とか片親とか、一般的には何も困っていないようにみえる子どもたちです。でも、ほとんどがリピーターで、子ども食堂の開催を楽しみしてくれているようで嬉しいです。
昨年、小6女子のママから、『コロナの影響から外に出たがらなかったけど、子ども食堂は行く行くというとのこと。親としてもありがたい存在です』との嬉しい言葉をいただきました。
スタッフ9人は趣味仲間で、子ども食堂以外にも出かけたりして仲良しですが、いずれも高齢者。孫のような子どもたちとの交流に癒されながらもいつまで続くかわからない感じ。令和7年度は続けられそうですが、無理はしない、と決めています。
- 活動場所も資金も自分で用意をして運営しており、活動場所のローンがあるため仕事をしなくてはならない。休みの日に活動をしており時々休みたくなるが、楽しみに待っている方がいるのでがんばれる。そして私自身も助けて頂いています。ボランティア的な活動ではなく仕事となる支援をしていただきたい。せっかく手にいれた場所ですが古い建物であり、リフォームまではできずにいます。安全確保のためにも何とかしたい。
- 私たちは、不登校ひきこもりのお子さんとそのご家族を対象にしています。同じような境遇や胸のうちを安心して話せる場として少しずつ広がり、新しいメンバーが増えてきました。
また、卒業をしていく者もいます。卒業されたご家族がスタッフになりお手伝いしてくださることもあり、大変有り難く心強い仲間となっています。「こういう場が欲しかった」「自分も支える側になりたい」と自らの経験を活かしたいという声がありました。大変嬉しかったです。
まちかど保健室さんが大変好評でした。またお願いができるといいなと思います。
お配りできる食材などが減ってきたことを改めて痛感しつつも、貴重な品々をお渡しできています。宜しくお伝えください。
- 受付になんでも言いたい事ポストを置いてある。書いてある事は今日の献立の感想と来てよかったという感想が多いです。
- こども食堂の代表である私の理想は、こども食堂なる場所が日本から全て無くなることです。
こども食堂がやっていることは、人情が厚い昔の日本には当たり前にあったことです。近所のおばちゃんがちょっと困った家庭のこどもにご飯を食べさせたり、悪いことをしたら近所の怖いおじさんにしっかり叱られて人の道を教わったり、これが当たり前でした。そして、こどもは大きくなっていったのです。
こども食堂がやっていることが、社会で普通に行われる未来、これが理想です。そんな未来が来る事を心から祈ってます。
- 役所や学校に子ども食堂の宣伝を協力してもらいたい(開催案内チラシの配布など)。
- 小学生だった参加者がスタッフとして、戻ってきてくれた。
子ども好きの認知症の方が毎月参加、仲良くなったお子さんの保護者の方が家族間で調整して、その方のために毎月お子さんを連れてきてくださっている。
「ありがとう」「美味しい」「ご馳走様」「たのしい」「〇〇さんいる？」「またね」などの何気ない会話がスタッフの活力になっている。
- まだまだ利用したい人はいると感じる、行きたいけど行きにくい！など思っている人がいるようです。

一人が一人に声かけし、徐々に輪が広がって来た感じがします。参加者の多い少ないはありますが、続けていこうと思います。時々「疲れたー」と感じますが、お弁当を取りにくる人達が「本当に助かります」と言ってくださるのが救いです。

- あまり「貧困支援」ということを言わないでほしい。目立てば目立つほど、本当に必要な人が来にくくなると感じます。
- こんな活動に賛同してくれる人がどれだけいるのかと当初思っていたのですが、参加する側はもちろん、ボランティアをしたい人、寄付をしたいと言ってくれる人、何か役に立ちたいと名乗り出てくれる人が多いことに驚きました。参加者からボランティアへ自然に移行する人、また、ボランティアで始めたけれど参加者としても楽しんでいる人もいて、区切らない自然な居場所になってきていると感じます。
- 子連れ家庭の親御さんからは「毎月のこども食堂を楽しみにしています」という嬉しい言葉を聞けたり、「今日はお昼ごはんをつくる気がしないから食べにきました」と気軽に来てくださる方(未就学児のこども連れ家庭)など理由は様々ですが、地域の皆さんが気兼ねなく立ち寄れる場所でありたいといつも思っています。「支援」というところまではなかなか届かないかもしれませんが、活動を続けていく中で困難家庭と繋がりができることもあるかもしれないので、今後も継続していきたいと思います。
- 困窮家庭の援助、特にフードパントリーで笑顔を見た時、役に立っていることを実感した。これからも続けようと思う。スタッフが少ないので、もう少し周りの皆さんに興味を持って頂きたい。
- こどもたちが楽しみにしていること、家庭から相談をされることを、市役所・福祉センターにお話しして解決出来たことがあり、役に立ったことがあった。私たちがつながりを作ることは、家庭の力となっていると思われる。
- 地域の子供達のために、と始めたこども食堂でした。新型コロナの期間は主に母子、父子家庭を対象にパントリー活動を行いました。たくさんのつながりができ、9年目を迎える今では、スタッフの中に元々不登校だった子やヤングケアラーである高校生や大学生も混ざって、わいわい賑やかに調理するところに子供達がやってくる地域の子供食堂となりました。
父子家庭でガス台もない家で育った女の子が、自分で卵焼きを焼いて嬉しそうにしている姿を見て、こっそり感動してしまいました。
初めて食堂に来た頃は何かと心配が多かった子どもも、年月とともにたくましく成長していく姿を見ると、スタッフとしてもとても嬉しく、これまで活動を続けられるように支えてくださった多くの方々に感謝するばかりです。
- ✓エピソード
地域に暮らす一人暮らしの高齢者からは、温かい手料理を毎月食べられるため、大変ありがたいというお言葉を頂いています。
✓嬉しかったこと
年齢の若い学生ボランティアさんが子どもたちと関わることで楽しそうな場所になっていることや、高齢スタッフや参加者が楽しそうに調理に携わっている姿が印象的。
✓懸念材料
昨今の物価高や人手不足の影響で、こども食堂の必要性が高まっていると考えますが、一方で超高齢化超少子化社会も重なって、家庭や仕事、低収入のため、ボランティア活動の継続が難しい状況が増加している気がします。また後継者不足で代表交代も難しい気がします。地球規模の課題が山積している中で影響を受け続ける居場所活動という草の根レベルの活動だからこそ、知恵を絞った横の連携や業種を超えた協力が必要かと思っています。
- 利用者さんで来ていた人が、率先してボランティアスタッフとして活躍しています。
- 回数を重ねていくと参加者同士のつながりであったり、子供の成長を感じることが多く、参加者からのお礼の言葉、会うたびに「早くこども食堂に行きたい」と子供たちの言葉が本当に嬉しいです。